

〈書評論文〉

グローバル家族と育児

——台湾とアメリカ合衆国における育児、移住、階級——

Pei-Chia Lan,
*Raising Global Families:
 Parenting, Immigration, and Class in Taiwan and the US*
 (Stanford University Press, 2018)

相澤 亨 祐

1 はじめに

本稿で扱うのは、台湾国立大学の社会学教授 Pei-Chia Lan による著作である。前著である *Global Cinderellas* (Lan 2006) は、アメリカ社会学会から表彰されるなど世界的に高い評価を得た。著者にとってそれ以来の英語の単著となった本書では、家族、家庭という私的な領域に、階級格差や国際移住といった要因がどのように作用するのかという問題関心を継承しつつも、前著の移住家事労働者に代わって「育児 (parenting)」という新しい主題に挑戦している。

本書が分析の対象としているのは、台湾や大陸中国にルーツを持つ中国系家族の親たちである。表題に掲げられている *Global Families* とは、文字通り「グローバルな時代を生きる家族」を指しているが、その意味合いは国民国家という枠組みを超えて自由自在に世界をはばたく自由な存在というよりはむしろ、グローバル化のもたらす政治・経済的な不安定さと不平等のなかを生き抜くというイメージが強い。本書では、育児をそうしたグローバル化のもたらす不安定さと不平等を生き抜くための「安全保障戦略」と捉え、彼／彼女たちが子どもたちの教育、世話、しつけをどのように行っているかを著者自身が行った濃密なインタビューデータをもとに描き出している。

以下、まず第2節で本書の議論の要点をまとめる。本書の構成は、次のようになっている。まず序論で、本書の議論がよって立つ理論的枠組みと研究手法が提示される。第1章では、本書の議論の前提となる現代の台湾が置かれた地政学的な状況とそうした状況下で現代の中国系家族の親たちが直面する不安定さと不平等について、特に大陸中国とアメリカ合衆国との関係に着目して説明している。つづく第2章から第5章では、本書の調査対象となる中国系家族を社会階級と国際移住によって4つのグループに分け、グループごとの「安全保障戦略」としての育児のあり方についてインタビュー内容の詳細な記述とそれに対する考察が行われる。そして、結論は本書全体のまとめとなっている。

第3節では、本書の内容が「家族戦略」論と呼ばれる家族研究の系譜に位置づけられる可能性について論じたうえで、本書の持つ意義と限界、そして今後の展望について論じていく。

2 「グローバル安全保障戦略」としての育児

2-1 本書の枠組み

著者はまず、中国系（あるいはアジア系）の育児は「タイガー・マザー」⁽¹⁾という表現に象徴されるような、きわめて教育熱心で厳しいしつけを伴うものだというステレオタイプが存在し、子どもの自立心と自律性を重んじる「西洋的」な育児と対比されて語られてきたことを指摘する。もっとも、こうしたステレオタイプはまったくの虚像であるというわけではない。本書が調査対象としている親たちのほとんど、そして著者自身が幼少期を過ごした1970年代、80年代の台湾は、本書の調査が行われた2010年代に比べれば社会全体が経済的にはるかに貧しく、体罰を伴うしつけも学校だけではなく家庭においても広くみられることであったと著者は回想しており、本書で登場する親たちはそのように貧しく、権威主義的な環境下で自身の子ども時代を過ごしたと位置づけられている。

しかし、こうした環境下で育てられてきた子どもたちが今度は親の立場となった2010年代の台湾を取り巻く社会状況は、当時と比べ劇的に変化していると著者は述べている。「圧縮された」(Chang 2010) 近代化と社会変動を経て経済的には豊かになった一方で、大陸中国の共産党政府との政治的・軍事的な緊張関係や、アメリカ合衆国からの経済・文化

(1)「タイガー・マザー」という表現自体は、中国系アメリカ人で当時イェール大学の教授を務めていたAmy Chuaが2011年に出版した育児本である*Battle Hymn of the Tiger Mother* からきている(Chua 2011=2011)。著者は、こうした「教育ママ」的な育児のあり方がステレオタイプ化された中国系(アジア系)育児の典型であるとしている。

的な資本の流入、東南アジアへの経済資本の流出などのグローバルな環境の変化によって、台湾は社会的な不安定さ (insecure) と不平等という問題に直面している。そして、こうした社会的状況下ではもはや育児のあり方も一様に貧しい環境下で権威主義的に行われるものではなく、大きく変化し多様化していると著者は捉えている。

中国系家族の育児の多様性を捉えるため、著者は次のような2つの2値変数を用いることでインタビューたちを4つのグループに分類する。1つは社会階級であり、インタビューの経済状況と学歴に応じて「中産階級 (middle class)」と「労働者階級 (working class)」に分類している。社会階級によって育児のあり方が異なり、それによって社会階級が世代間で再生産されるというのは、Pierre Bourdieu をはじめ社会学のなかで繰り返し指摘されてきた点である。特に近年では、Annette Lareau がアメリカ合衆国における社会階級による子ども期の不公平性について論じた研究をはじめとして育児研究の重要な観点であるとされており (Lareau [2003] 2011)、社会階級という変数を採用することは育児に関する既存研究の潮流をおさえたものとも言える。一方で、階級間の比較を行うだけでは見過ごされてしまうような同一階級内の多様性を捉えるため、同一の階級を別の変数を導入することでさらに細分化することを著者は提案する。そのための変数が、著者が研究関心の中心に据えるグローバル化が与える影響を比較検討するための「移住」である。ここで言う「移住」とは、「台湾に暮らす」か、あるいは「アメリカ合衆国に移住して暮らす」かの2値をとるものである。

こうして「階級 (中産階級か、労働者階級か)」と「移住 (台湾に暮らすか、アメリカ合衆国に暮らすか)」という2つの2値変数を用いて、インタビューである中国系家族を「台湾に暮らす中産階級」、「台湾に暮らす労働者階級」、「アメリカ合衆国に暮らす中産階級」、「アメリカ合衆国に暮らす労働者階級」の4つのグループに分類している。そのうえで、インタビューデータを仔細に分析することで、類似した民族的、文化的背景を持つ彼／彼女らの育児が「階級」と「移住」によってどのように異なるのかを比較検討している。

ここで、著者はアメリカ合衆国への「移住」を経験したグループだけがグローバル化の影響を受けていて、国際移動を経験せずに台湾に暮らすグループはグローバル化の影響を受けていないというような単純な対比関係は採用していない。著者によれば、グローバル化は育児をする親たちに相反する感情をもたらすという。それは、1つにはグローバル化によって子どもたちが多様な文化資本を獲得し国民国家の枠組みを超えて活躍する機会が得られるのではないかという希望を感じる一方で、グローバル化、特に著者が新自由主義的なグローバル資本主義と呼ぶような状況は世界をますます流動的で予測不能なものにしており、それが親たちに将来に対する不安 (anxiety and insecure) を感じさせている。

こうしたグローバル化が親たちにもたらすアンビバレントな感情は、著者によれば国際移動を経験しているかどうかにかかわらず現代で育児をする親たちが一様に感じており、各々が置かれた状況によって内容に違いこそあれ誰もが育児をする上でグローバル化に対して対応する必要があると感じているとしている。こうしたグローバル化がもたらす将来の不安に対応しようとする育児のあり方を、著者は「グローバル安全保障戦略 (global security strategy)」と呼ぶ。このように、現代における育児を「グローバル安全保障戦略」として捉える点が本書のポイントであり、社会階級と国際移住の経験の有無によって各グループの「グローバル安全保障戦略」としての育児がどのように異なるのかを比較検討するというのが本書の課題となっている。

著者によるインタビュー調査は、2010年から2013年のあいだに行われ、台湾に住む57家族、計80名の男女の親たちと、アメリカ合衆国のマサチューセッツ州ボストン近郊に住む48家族、計56人の男女の親たちにインタビューを行っている。

次項では、各グループの「グローバル安全保障戦略」としての育児のあり方について、それぞれの要点を述べる。

2-2 「グローバル安全保障戦略」としての育児の多様性

金銭的な貧しさや権威主義的な周囲の大人たち、学校教育における熾烈な競争などで、子どもらしい自由や楽しみを十分に経験することができなかった台湾の中産階級の親たちは、自身の子ども時代が「失われて」しまったことを悔やんでいると著者は言う。そうした親たちは、「伝統的」な権威主義的育児や詰込み教育ではなく、子どもたちの自立心と自律性を培うような自由な環境下で子どもたちを育てようとするようになる。と同時に、将来的なグローバルな競争や移動に対応できるような能力を子どもたちに養ってほしいとも願っており、自分たちが通ってきたような画一的な学校システムの枠組みに縛られることなく、子どもたちをインターナショナルスクールや西洋的な学習カリキュラムをもつ私立学校等に通わせて英語力や自立心などのグローバルな競争力を幼少期から培い、国際社会で通用するような文化資本を身に着けられるように計らっている。中産階級の親たちがこのような戦略をとるのは、何よりもまず彼／彼女らが十分な経済資本を持っているからであり、また十分な教育を受けており西洋の言語や社会的スキルを好む文化資本を持っているからであると著者は考えている。一方で、こうした自由度の高い育児では時に親が子どもたちを過剰なまでに管理・監督することが求められることになり、それが子どもたちの自立心と自律性を育むのを妨げてしまうという意図せざる結果を招いてしまうこともある。

台湾の発展とともに経済的な豊かさを手に入れることができた中産階級の人々とは対照的に、台湾に住む労働者階級の人々は経済的に恵まれず雇用も不安定な状況に置かれている。特に労働者階級の男性たちは、そうした経済的な貧しさ、不安定さゆえに台湾人の配偶者を見つけることが難しく、近年では大陸中国や東南アジア出身の女性と結婚する人が増加している。そうした移民の母親たちは台湾社会のなかではスティグマの対象とされることがある一方で、近年の大陸中国や東南アジア地域の発展を背景に移民の母親が持ち込む文化的な差異が重要な資源とも見なされるようになっており、母親の持つ言語や文化が民族資本として子どもたちに受け継がれるようにもなっている。また、労働者階級の親たちも、子どもたちを学業のプレッシャーから解き放ち自由な環境下で育てたいと願っているという点では中産階級の親たちと変わらない。しかし、労働者階級の親たちが持つ金銭や時間といった資源は限られているため、そうした自由は中産階級の育児のように細かな管理によって実現されるものではなく放任するというかたちをとるため、時に親としての怠慢として批判の対象となってしまう。さらに、労働者階級の親たちが持つ経済力や文化資本の乏しさによって、彼／彼女たちの親としての正当性はたびたび危機に直面する。そのため、賃労働にひたすらに励むことに親としての正当性を保とうとした結果、育児のための時間がとれなくなってしまうということや、自身が責任感のある親であることを証明するためにしつけを厳しくするがあまりに体罰に走ってしまうというような逆説的な状況も生じている。

アメリカ合衆国へ移住した中産階級の中国系家族の親たちは、専門性が高く賃金も高い職業を得ることができた一方で、職場では思うように出世ができないなど人種的な不平等に直面することとなった。特定の国籍や人種の人々が社会的に上昇しづらい状況を「ガラスの天井 (glass ceiling)」と呼ぶことがあるが、それがアメリカ合衆国における東アジアにルーツを持つ人々の場合にはより顕著であるとされており、特に「竹の天井 (bamboo ceiling)」と呼ばれている。また、アメリカ合衆国の大学入学にはアジア人の学生に対する「アジア人・クォータ」があり、限られたアジア人への割り当てをめぐるより一層競争が熾烈化するとされている。こうした状況に対して、中産階級の親たちは自分の子どもたちの将来について強い不安と危機感を感じており、アジア人がアメリカ合衆国で生きていくにはアジア人以外の人々に比べて「2倍優れて (twice as good)」いなければいけないのだといった語りインタビューの中で随所に現れている。そのための戦略として、子どもたちをバスケットボールやアイスホッケーなど「アメリカらしい」課外活動に参加させることで競争的同化をはかるという方法をとる人もいれば、そうしたメジャーで競争が激しい課外活動のなかで他の子どもたちとの競争に敗れることで子どもたちの自尊心が損

なわれるようなことを避けるために、フェンシングやピアノといった課外活動を子どもたちに行わせる人々も見られる。また、台湾や大陸中国の発展を受けて中国的文化を身に着けることの重要性が近年高まっており、たとえば、かつてアメリカ合衆国で暮らす中国系の人々のあいだでは正しい英語を身に着けるうえで「なまり」をもたらす中国語は話せないほうがよいとさえ考えられていたが、現在では中国語や中国的文化を子どもたちに習得させるために長期休暇を利用して台湾や大陸中国に住む親族や友人のもとに子どもたちを預ける親も少なくない。また最近では、移民2世以降の人々のなかでさらなる社会的地位の上昇を目指してアメリカ合衆国から台湾や大陸中国に「戻る」という戦略をとる人々も現れている。

アメリカ合衆国に暮らす労働者階級の親たちは、言語や文化が大きく異なり、台湾や大陸中国で得た学位や資格が通用しないアメリカ合衆国に移住したことで、社会的地位の下落を経験する 경우가少なくない。一方で、アメリカ合衆国で生まれ育った子どもたちは言語や文化の面で親よりもはるかに早く適応し、社会生活のさまざまな面で親をサポートするようになる。その結果、児童保護システムが台湾よりもはるかに発展しているアメリカ合衆国ではしつけの手段として体罰が使えないということもあり、労働者階級の親たちの多くは親としての権威を失ってしまう。しかし、こうした権威の失墜はインタビューの中では必ずしもネガティブなものとして語られるわけではない。彼／彼女らによれば、子どもの自然な成長を促す自分たちの寛大な育児のあり方は、権威的な親とそれに従う子どもという親子関係ではない、「アメリカ化」した親子関係なのだという。著者は、こうした語りこそがアメリカ合衆国という社会で周辺化されるなかで労働者階級の親たちが作り出した1つの戦略であり、同化の手段なのだとしている。しかし、このようにアメリカ合衆国への同化を強調する語りをする一方で、労働者階級の親たちは十分な経済的、文化的資源を持たないために地域の移民コミュニティや国際的な親族ネットワークから教育資源を得るほかに選択肢がなく、それによって自分たちの親としての権威を取り戻そうと考えている。

3 「家族戦略」論として読む

以上が、本書の要旨である。最後にまとめの章があるが、その内容の多くは序論から第5章までの要約にあてられている一方で、本書の一連の考察によって得られた知見の学術的・理論的意義についてはほとんど触れられておらず、まとめとしては物足りなさを感じざるを得ない。特に、前著からの著者の主たる関心がグローバル化にあることもあってか、

育児という家族研究において重要な論点を主題としているにも関わらず家族研究としての本書の位置づけは本書全体を通じて明瞭に示されているとは言い難い。そこで、本節では本書の知見を既存の家族研究の議論、特に「家族戦略」論のなかに位置づけ、その意義と限界について議論する。

「家族戦略 (family strategy)」概念について、田淵六郎は「家族を単位として行われ、家族の社会的地位と社会構造を再生産しつつ行われる適応的行動を指す分析概念」と定義している (田淵 2012: 38)。「家族戦略」論とは、この「家族戦略」概念を議論の中心に据えた諸研究を指し、その中には家族に関する特定の領域をみつかったもの (たとえば、「結婚戦略」や「育児戦略」、「相続戦略」など) も含まれるが、これらに共通した特徴として、家族を既存の規範や規則、マクロな社会構造に対して受動的な存在ではなく、家族の利益を高めるために適応的に行動する主体として捉える点が挙げられる。

本書では、「家族戦略」概念が広まるきっかけとなったとされる Bourdieu の『結婚戦略』(Bourdieu 1972=2007) をはじめとして、「家族戦略」論についての諸研究は参照されていない。しかし、本書の議論の中心概念として「戦略 (strategy)」が用いられていることや、グローバル化のもたらす政治的、経済的、文化的な社会状況に親たちが育児という戦略を通して主体的に対応する様を描き出すことが本書の主題となっていることを考えると、本書の議論は「家族戦略」論として読むことができると考える。

このようにしてみた場合に、本書の研究はグローバル化のもたらす不安定さと不平等に対する「家族戦略」としての育児のあり方をその多様性を捉えつつ見事に描き出した研究として、家族研究の文脈でも重要な意義があると言えよう。特に、同じような社会的、文化的な環境下で子ども時代を過ごした人々が親世代となった際の育児のあり方が、社会階級のみならず、国際移住によっても大きく異なりうることを実証した点は重要であると思われる。

一方で、「家族戦略」論の視点から見た場合に本書の議論に欠けている視点についても指摘することができよう。「家族戦略」論のなかでは、家族は戦略の主体であると同時に利害の異なる個人の戦略が交差する場でもあると捉えられており、異なる戦略をもつ個々の家族成員が交渉や葛藤を経て家族としての戦略が形成されていく過程を検討することも重要な論点とされている。本書の議論では、教育方針をめぐる夫婦間の葛藤や、親の課す膨大な課題量に反発する子どもたちの様子が描かれる部分もあるが全体としてみればごく一部に過ぎず、家族はひとえに同一の戦略を持つ集団として、そして子どもたちはもっぱら親たちの育児戦略を受動的に実現しようと行動する存在として描かれている。親だけでなく子どもたちも含めた家族内の各アクターの主体性や夫婦間・親子間での交渉や葛藤に

着目し、家族としての育児戦略が形成されていく過程も描き出すことで、よりダイナミックな分析が可能になるのではないかと考える。

参考文献

- Bourdieu, Pierre, 1972, "Les stratégies matrimoniales dan le système de reproduction," *Annales E. S. C.*, 4-5, juillet-octobre: 1105-27. (丸山茂・小島宏・須田文明訳, 2007, 「再生産戦略システムにおける結婚戦略」『結婚戦略』藤原書店, 199-244.)
- Chang, Kyung-Sup, 2010, *South Korea under Compressed Modernity: Familial Political Economy in Transition*, London: Routledge.
- Chua, Amy, 2011, *Battle Hymn of the Tiger Mother*, New York: Penguin Books. (齋藤孝訳, 2011, 『タイガー・マザー』朝日出版社.)
- Lan, Pei-Chia, 2006, *Global Cinderellas: Migrant Domestic and Newly Rich Employers in Taiwan*, Durham and London: Duke University Press.
- Lareau, Annette, [2003] 2011, *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*, 2nd ed., Berkeley: University of California Press.
- 田淵六郎, 2012, 「少子高齢化の中の家族と世代間関係——家族戦略論の視点から」『家族社会学研究』24 (1): 37-49.

(あいざわ りょうすけ・修士課程)